



初めてのキスの味



案山子 (Read Me. 47G)

もうすぐ冬が終わりを告げる頃だというのに、まだ部屋の中は冷たい空気で満たされていた。
暖かい布団の中は、私の目覚めを再び眠りへと誘う。

とても幸せな時間。

私だけの場所。

自らの体温による暖かさに満ちた世界。

「いつまでも寝ていたらいいじゃない」

とても魅力的な提案だけど、さすがに学生の身分でいつまでも眠ってばかりいられない。

私は布団から出て、枕もとに置いてあったテレビのリモコンをつける。

映し出された映像は天気予報だった。どうやら今日は一日中ずっと雨らしい。

「やっばもう一度布団の中に入ろうかな」

私がこんなにも怠惰な雰囲気が出しなのは、昨日、ずっと好きだった先輩に告白したからだった。別に断わられたわけじゃない。返事をまだもらっていないのだ。けど私の経験上、すぐに返事をもらえないというのはかなり期待薄であることが多い。

今回はけっこう上手くいくと思ったんだけどなあ。

そんなことを考えながら、お母さんが用意してくれた朝食を食べ終えて、学校へと向かった。私の家は坂の途中に建っているため、玄関を出たらいきなり坂道になっている。幸い登校時は坂道を下ることになるのだが、その代わり下校時は身体的にかなり辛い思いをする。

いつもの坂道。

見慣れた風景。

代わり映えのしない日々。

こんな退屈な日々でも、もしかしたら自分の少しの勇気1つで、変えられるかなって思ってたのに。

まさかこんな思いに苛まれるなんて、思ってもみなかった。

やっば告白するのやめたほうがよかったのかな。

なんてどうしようもないことを、手にしていた傘を少し下げて、俯きながら考えていた。

ふと視線を前にやると、そこにはいつもと違う景色が目の前に入り込んできた。

「あれ……先輩？」

そこには、昨日からずっと私の心の中を支配している――昨日私が告白した先輩が立っていた。

しかも雨に濡れたまま、傘も差さずに。

「せ、先輩、そんなことしてたら風邪ひきますよ！」

私は慌てて、傘を先輩に差し出す。

すると、いきなり先輩が私の手を取って、半ば強引に私の身体は先輩の胸に引き寄せられた。

「え……、ちょ、ちょっと先輩――んっ」

そして突然、私の唇は先輩の唇と重なる。

ああ、そうか。

代わり映えしない日々なんて思ったから、きっとバチがあたったんだ。

だからこんなにも――私の高鳴る胸の鼓動は抑えられそうにないし、考えられない出来事が突然起こったりするんだ。

初めてのキスは、甘酸っぱいレモンの味がするって聞いたことあるけど、

あれってやっぱりウソだったみたい。
だって先輩とのキスは、
なんていうか、とても雨の味がした。

—————The first kiss tasted like rain.closed.

